現代の文学教育のあり方

榎園　久

序言

現代に位する文学教育のあり方について、現代教育課程論を背景にして、文学の機能とそれを通しての、あるべき人間の形成はどのように推し進められなければならないかという方面から少しく考察してみたい。

周知のように、荒廃に満ちた現代は、前近代的な封建性の残滓を完全な形において払拭し終えないまま、また同時に、新しく発生しつつある、近代の個人的自由主義の矛盾を、ますます深めている状態にある。

わが国の近代史は、農業を基盤とした崩壊しつつある封建制度が、工業社会のさまざまな要請に対し、いかに対処していったかの記録として理解されるが、資本主義と自然科学とがあいまって完成した、近代競争社会の物質文明は、経済的条件の急速な変化にもかかわらず、それが刻々と、人間生活全般にわたって決定的な影響を与えるようになりはしても、現代の荒廃から人間を救済していくものではなかった。

このような体制の矛盾は、現代の高校生の意識にどのような影響を与えているであろうか。最近、とみに目だって活発になってきた、学生運動の過激派の爆弾事件、それらに表象される現代の病める街道を突進する十代の暴走族、彼らは、まさしく、自分の現実、そして将来のいずれにも深い絶望を感じさせられているのである。こうして、受験勉強に明け暮れる一流高校でも、また、能力の低い者ばかりが集まったと、教師が口に出して侮る三流、四流の高校でも、大部分の高校生が、現実の高校生活をやりきれないものと感じている。進学競争の中で主体性を喪失させられた高校生が、自我の拡張、青年期の充実感を、闇の中を空しく暴走するハンドルにしか求められない姿はなんともいたましいかぎりである。

このような、体制の中の高校生の絶望感は、能力の高低に応じて進学や就職に差がつくのは当然なことだという優勝劣敗の自由競争を原則とする近代社会の体質から発している選別の論理による。それゆえに、民主化、近代化、合理化などを指標とした戦後の社会改革の成果こそが、自分たちを疎外する要因だと思いつめている急進的高校生たちは、民主主義者と保守主義者のいずれをも自分たちの敵だと考えているのである。そして、このような体制の矛盾の中で困惑する高校生の間にどんよりとよどんでいる無気力・無感動と、

過激な暴力行動とは同じものの表裏にすぎないと見るべきである。

さて、右に見たことからも帰納されるように、現代社会の矛盾と空虚さとは過度の資本主義の進展に基づくものであり、現代文明社会の病根は、刻刻と人間の心を侵蝕してゆきつつある資本主義という社会体制である。すでに、戦後に、経済的レベルで、一つのエポックを画し、元禄という言葉が人口に膾炙されて久しい現代の物質氾濫の世の中は、また人間をさえも商品としてしか扱わない冷酷無慈悲の体制であり、この資本主義体制は、かつて農村を破壊し、人口の都市集中化をはかり、現在もその延長上にあるように、人間の心を蝕み続けているからである。

このような現代の中において、生きるとは、はたしてどのような意味を持つものであろうか。また、何が現代人の心を動かし、現代人は何を信仰し、どこに足場を求めて、その日常を前に進めなければならないのであろうか。深淵の上に設置されている、資本主義社会という一つの人工の機構の中でのわれわれの明け暮れが、人間らしい輝きを持つのはどのような時であろうか。そして、文学は、このような時代の中におかれている人間の救済にいかような役割りを担うものであり、また、文学の機能を通しての人間形成は、現代を生きるにふさわしい人間の育成と、どのように関連を持ってその役割りを果たしていくことであろうか。

本　論

さて、国語教育の性格と目的とについて、国分一太郎氏は、それの教育全体の目的と関連させて、「教育・国語教育」という考え方を提出して、次のように説明しておられる。「各教科・教科外の指導をふくめて、あらゆる教育活動には、学力をつけることと、人格をつくることと、ふたつの側面があるのだから、教科としての国語の学力を子どものものにする国語科独自・特有の目的と、人格をつくるという全教育に共有の目的があるのだ。この両側面をともに忘れぬようにし、また統一して果たすために、すこししちくどく『教育・国語教育』という考え方をしたいのだ」（『国語教育の本来像』新評論社刊。P17）

このことはまた、次のような国語教育の目的の図式

(a)　知識・能力・習熟の教育

(b)　世界観・見解・信念・行動の教育

あるいは、

(1)　国語の学力をつける側面

(2)　読解指導・表現指導・文学指導・文学教育・その他の諸過程を通じて、人格の形成を目ざす側面

で表わされるもので、それぞれ(a)と(1)、(b)と(2)とが、いわゆる「陶冶」の面と「教育」の面とを受け持つことを意味している。このような、氏の国語教育の性格と目的とについての考え方は、さらに具体的に述べれば、

a　国語教育独自の目的――国語についての学力をつけること（文字・発音・単語・文法・文・文章についての意識的自覚をうながし、生きた知識として定着すること）

b　全教育と共有の目的――人格・世界観の基礎をつちかっていくこと

(イ)　子どもたちの観察力・表象力、記憶力・想像力、思考力をのばすこと（形式論理的な思考力のやしないをも重視して）

(ロ) 物の見方・考え方・感じ方を正し、高め、ゆたかにすること（弁証法的な認識の基礎のやしないにも心をとめて）

ということになる。そして「日本の子どもたちが、ごく普通に必要な日本の文字を覚えたり、日本語の文法について意識的な自覚を持ったり、日本語の文章をかきつづることができるようになるのも」（同書P19）学校教育の中での、より意識的・計画的・系統的な、人間形成だと考えられるから、このようなものとして国語教育をとらえるならば、先のa、bの二つの目的を合したものが、国語教育による人間形成ということであり、このことによって、「『国語教育における人間形成』といった曖昧な問題も解消されて、全体の教育が目ざす意図的なのぞましい人間の形成の仕事に、国語教育もスッポリとはいることになってくる。したがって『学力をつけること』と『人間をつくること』が、べつべつのもののように考えられがちな欠陥も消滅することになる。そして、わたしたちは、ごく常識的なことばとして使われる『学力づくり』と『人間づくり』とを、正しく、しかも統一して位置づけることができるようになる」（同書P29）

だから、国語科の教材化は、右に見たa、bの性格と目的とを満足するものでなくてはならない。

ところで、われわれは、人間形成と文学との関わりについて、しばしば次のような言葉を目にする。例えば、奥野健男氏の、「私はドストエフスキイの『悪霊』と太宰治によって文学に目を開かれ、人生観を一変させたが、文学には人の一生を変えてしまうような力があるのだ。それは人生の行く手にある地雷とでもいえよう。（中略）人間が部分化された世の中では、文学を読むことによって全体的な人間性を身につけるべきだろう。文学は人間的なバランスをとるために大きな価値があり、それなりの役割りを果たすにちがいない。」（「現代人と文学」南日本新聞・昭42・11・20）また、島崎藤村も、「飯倉だより」の中で、「近ごろ私は少年期から青年期へ移るころにかけて受けた感動が深い影響を人の一生に及ぼすということに、よく思い当る。ちようどそうした心の柔らかい感じ易い年ごろに、私は芭蕉の書いたものを愛読した。その時に受けた感化が今だに続いている。」と述べている。

ここに見る、文学が人生観を一変させて、「人の一生を変えてしまうような力」（奥野）を持ち、あるいは、「少年期から青年期へ移るころにかけて受けた感動が深い影響を人の一生に及ぼすということ」（藤村）は、文学と人間形成との重大な関わりとからんで、明らかに、文学に特有の機能につながるものを象徴しているといえるだろう。

このような、享受者に対する影響力は、文学のどのような属性に出発しているものであろうか。平野謙氏編の『わが青春の文学』（集英社刊）は、「文学は人間をいかに変革させるか？とくに多感な青年期の読書が、のちの人格形成にどんなに役だったか？」ということについて、単に文学者だけでなく、現在各界の第一線にたつ方方の読書経験を集めたものであるが、その中で、石原慎太郎氏が、次の、興味あることを述べておられる。「（前略）今となってもよく、私は、ジイドがあの美しい青春の書、『地の粒』の中で、ナタナエに向って情熱について語った言葉や、カロッサの『ルーマニア日記』の中での、出来損いの人間についての悲痛なオプティミズムの告白の一句を懐かしく、また、今も生命あるものとして思い起

す。

それこそは青春の読書が与えた、かけがえのない感動と戦慄の余韻に他ならない。

そしてまた、青春期に、それを得ることの出来た人間の幸福がそこにあるのだ。

青春の読書の遺産は、後の人生に於ける伴侶であり、武器でもある。

人間は、青春の読書によって予感し味わった未知の戦慄がとりも直さず、自分自身のものであったと言うことを必ず後になって知るのだ。

人生にとっての、青春の真の遺産は、恋愛と読書であると思う。前者は、人生への薔薇色の幻覚を与え、後者は人間の存在に関しての戦慄を与える。

前者は後の人生に於いて必ず破れ、後者は必ず実るのである。一生を通じて、創造と言うものに全く縁なき人間にとって、青春期に於ける読書は、一つの創作と言っても良い。

感動深く、印象深い作品を読むことで味わう戦慄は、己の未知の人生と言う、書かれざる作品への興奮でもある。その時、人々は己の人生を一つの虚構として想定し、己に許すのだ。たとえ、後の人生が、それが崩れ破れるためだけにあったとしても。（後略）」（傍点は引用者）

このエッセイは石原氏自身の青春の読書のありさまを語るとともに、青春との関わりの中から、文学の保持する独自・特有の機能について、結果として、述べたものと考えることが出来るだろう。「感動深く、印象深い作品を読むことで味わう戦慄」が、「己の未知の一生と言う、書かれざる作品への興奮であ」り、「その時、人々は己の人生を一つの虚構として想定し、己に許すのだ」という言葉は、文学が感動を通して、その享受者に対して、そこから、一つの別の新しい生涯を創造させるという、文学の有する機能を十分な形において説明しているものである。これはまた、次の西尾実氏の文章とも論旨を等しくしているものといえよう。「その作品が、鑑賞者の主体的な体験として喚起された生活問題意識と、それの展開として成立するイメージは、むしろ創作的な体験であるとしなくてはならない」（5文学鑑賞復興の必要と意義『戦後文学教育研究史』上巻、未来社刊）

同じように、藤村詩序の「生命は力なり。力は声なり。声は言葉なり。新しき言葉はすなはち新しき生涯なり」（傍点は引用者）の部分は、この文学の機能について述べているものである。乾孝氏が、「文学はことばをなかだちとして、一定の感情的な体験（イメージ）をひきおこして、その流れのうちに思想を伝達することによって、相手のその後の外界反映に方向づけをあたえるというはたらきといえよう」（2幼児の精神的発達と文学教育『戦後文学教育研究史』上巻）と述べておられるように、ここに見る人間形成の論理は、まぎれることなく、このような文学の機能と奥深く結びついているものである。そして、ここを原点として文学教育の実際の活動は展開されるものでなくてはならないだろう。

このような、人間形成をもたらす文学の機能による影響のあとは次の井上清氏の文章にもよく示されているところである。「『若菜集』一巻が世に与えた衝動は、今日それを想像することはむつかしい。『若菜集』のページを開いた者は、自分の心に伝わり、心を震

わせてくる今まで見たこともなかった詩の言葉にさながら酔えるようになったにちがいない。そこには自分の心が明るく、大胆に、率直に、しかも美しい調べを伴って刻まれてある。『若菜集』一巻によって、人々は自分を取り巻くすべてのものが、風の音も流れの輝きも、それを読む以前とは異って感じられたのである。そしてこの藤村の影響の下に土井晚翠、薄田泣菫、与謝野晶子、蒲原有明、さらに降って北原白秋、三木露風、石川啄木といった新詩人が続々と誕生してくることになる。明治から大正の初めにかけて日本の詩歌壇は百花が一時に咲き乱れた観を呈するが、これは『若菜集』一巻が投じた波紋であると言っても過言ではない。（藤村詩の生命『日本の詩歌』島崎藤村）

先に、われわれは、国語教育の性格と目的とが、現代教育学の「陶冶」の面と「教育」の面とを満足するものでなければならないことを確かめたが、右の文学の独自・特有の機能はこのこととどのように関わりあうものであろうか。

文学教育の目的については、様様に考えられるだろうが、国分一太郎氏は次のようなことをあげておられる。

(1) 文学とはどういうものか、その本質や種類や歴史などについてのたしかな理解、感覚的なまた知的な理解を順次に与えていかねばならないとするもの（文学についての教育）（傍点は国分氏。以下同じ）

(2) 文学というものをどう読むか、その正しい鑑賞・批評のしかたを、順次に子どものものにしていかねばならぬとするもの（文学鑑賞の方法・技術・態度・能力の教育）

(3) コトバを形式とする芸術である文学作品を研究吟味させる過程で、物事についての芸術的な文学的な認識のしかたを、順次に子どものものにしていかねばならぬとするもの（文学的認識、文学的思考、物事の芸術的、形象的なとらえ方の教育）

(4) すぐれた文学作品をよろこんで読ませる過程で、芸術的な趣味、美的興味を高めなければならないとするもの（文学美の教育）

(5) 文学作品を通して、子どもたちの物の見方・考え方・感じ方をゆたかにし、正しくし、新しくし、人間的な感情と生き方を探求させなければならないとするもの（文学を通しての教育、文学作品を用いての正しいモラルの教育）

(6) コトバのはたらきを最高度に生かしたよい文学作品にふれさせる過程で、コトバの教育につとめなければならないとするもの（国語教育としての文学教育）。（十四文学教育の目的『国語教育の本来像』P 180）

文学教育の目的を、このようなものと考えるならば、教科には、

(a) 学力を育てる側面――認識と技術の指導　(b) 人間を育てる側面――人格と世界観形成の指導があるから、文学教育の目的には、国分氏も言われるように、

(a′) 文学そのものについての理解・認識を順次に与えていく独自の目的

(b′) 文学作品をあつかうなかで、順次に人間形成・世界観のやしないをめざしていく目的

この二つの側面がはいることになる。そしてさきの様様な文学教育の目的論の、(1)(2)(3)(4)は（a′）に、(5)は（b′）にはいることになる。このように考えてくると、前に見た、人間形成と関わる文学

独自・特有の機能は、この（b′）に奉仕するものであることが明らかになってくる。

このような文学教育の目的は、さらに、国語科の中で、また、学校教育での基本的目的に合致するものでなくてはならない。すなわち、それは、「個人の尊厳を重んじ、真理と平和を希求する人間の育成」（教育基本法前文）であり、「人格の完成をめざし、平和的な国家及び社会の形成者として、真理と正義を愛し、個人の価値をたっとび、勤労と責任を重んじ、自主的精神に充ちた心身ともに健康な国民の育成を期して行なわなければならない」（同、第一条、教育の目的）と趣旨を同じくするものであり、また、「何人も、自由に、社会の文化生活に参加し、芸術をたのしみ、且つ、科学の進歩とそれの恩恵とにあずかる権利を有する」（人権に関する世界宣言の、教育の条項に続く第二七条）と書かれてある、この権利を充分に行使出来る人間を育てることであり、それはまた、現代のカリキュラム構案上の中核をなす、「市民的有能性」と繋がるものである。

文学教育を個体史的にとらえる場合、ドストエフスキイが『カラマーゾフの兄弟』の第十三編エピローグで述べている次の言葉は、幼児期の文学教育を考えていく上で、極めて重要な点を指摘していると言えるだろう。すなわち、「総じて楽しい日の思い出ほど、ことに子供の時分、親のひざもとで暮らした日の思い出ほど、その後の一生涯にとって尊く力強い、健全で有益なものはありません。諸君は教育ということについて、いろいろやかましい話を聞くでしょう。けれど、子供のときから保存されている、こうした美しく神聖な思い出こそ、何よりも一番よい教育なのかもしれません。過去にそういう追憶をたくさんあつめたものは、一生すくわれるのです。もしそういうものが一つでも、わたしたちの心に残っておれば、その思い出はいつかわたしたちを救うでしょう。もしかしたら、わたしたちは悪人になるかもしれません。悪行を退けることができないかもしれません。人間の涙を笑うようになるかもしれません。さっきコーリヤ君が『すべての人のために苦しみたい』と叫ばれましたが、あるいはそういう人に向って、毒々しい嘲笑をあびせかけるようになるかもしれません。むろん、そんなことがあってはならないが、もしわたしたちがそんな悪人になったとしても、こうしてイリューシャを葬ったことや、死ぬまえの幾日かのあいだ彼を愛したことや、今この方のそばでお互いに親しく語り合ったことを、思い出したら、もしかりにわたしたちが残酷で皮肉な人間になったとしても、今この瞬間にわたしたちが善良な人間であったということを、内心嘲笑するような勇気はないでしょう／それどころか、この一つの追憶がわたしたちを大なる悪からまもってくれるでしょう。そして、彼は過去を顧みて、『おれもあの時代は善良だったのだ。大胆で潔白だったのだ』と言うことでしょう。もっとも、腹の中でくすりと笑うのはかまいません。人はえてして善良で立派なおこないを笑いたがるものです。それはただ軽薄な心のしわざです。けれどもみなさん、わたしたちは誓って言いますが、よしんば笑っても、すぐに心の中で『いや笑うのはよくない、これは笑うべからざることだから……』と言うに相違ありません。」

芸術以前の、文学以前の年齢の時分から、文学教育を設計するということは、文学ということを狭く考えれば、否定されるだろうが、だからといって、これは、幼児の相貌的知覚と自己中心性

の状態から客観化への道すじを空白に、あるいは負数の何かをつめこむことを意味するものではないであろう。確かに、この時期の文学享受のテーマに対する幼児の反応はかなりの振幅を示すものであろう。たとえば、園児の集団生活のなかだちに絵本を利用した福知トシさんが同じ報告（幼児の文学教育をどうすすめるか、雑誌『文学教育』NO2宣協社）の中で、ピーターパンの物語のフックの役を演じた男の園児が、最後まで、演じる自分と演じる立場を理解出来なかった例話を述べておられるが、それがそうであるし、また、金山美沙子さんの報告（文学を核にした保育の一つの方法、雑誌『文学教育』NO3宣協社）にみえる『おおかみと子ぶた』の劇あそびの中で、子豚を食べる狼役の園児が子豚がかわいそうになって役をおりるエピソードがそうであろう。したがって、この時期は、文学が素材とする生活訓練全体の中に組みこまれるのが妥当で、そこから、さらに、金山美沙子さんが言われるように、「文学という次元に立って、その作品のテーマを子どもたちの中に定着させるためにさまざまな手段を使い」、「そしてそれが未分化な幼児であるが故に総合的なものとして行なわれ」、「そうすることによって全面的な教育がなされる」ということになる。これはまた、文学が保育の核となっていることを意味する。だから、幼児期においての文学教育は、客観化への道すじを確実なものにすることを目ざして、文学が幼児に与える目標は、坂本一郎氏のお説のように「(1)言語能力の発達を助長し言語生活をゆたかにする。(2)夢を与え想像力を伸ばす。(3)情緒をうるおし、美的情操を養う」（3児童文学の鑑賞の心理『戦後文学教育研究史』上巻）等に留意して、同時に、その後の一層の発展の為に、幼児の時期においては幼児らしい物の見方、考え方、感じ方を充分に伸ばすことが必要であろう。そしてこの幼児期には絵本に連なる豊かな心の故郷を用意してやるべきで、要するに、乾孝氏のいわれる「とまれ、ごまかしのない、おおらかに生きることへの自信、こういう気分の基調を調えること」（2幼児の精神的発達と文学教育『戦後文学教育研究史』上巻P66）が幼児に対する文学教育の中心課題であろう。

文学教育の目的は先に見たように(1)から(6)のことが考えられ、それらは教育学の「陶冶」と「教育」の両面に相渡って位置づけることが出来た。このように文学教育の目的が陶冶、教育の二面にわたることは、文学教育の目的が、国語科の読解鑑賞と担う分野を共有していることを意味するものであろうし、学習展開は教材の性格に従うので、こう考えると、文学教育とは、読解指導の中のある特殊な領域を占めるものといえそうである。無論、文学教育が、全教育と共有の目的――人格・世界観の基礎をつちかうことを目ざす場合は、明らかにその目的の趣旨に従うのでこの点に留意して学習が進められる。だから、文学教育は、広く読解鑑賞指導の中に含まれるが、この教育には、ことに人間形成の願望がこめられているので、そこには一つの個性ある部面が出てくるのであり、ここから、あるべき人間の育成を目ざして、意図的な一筋の光の道が設置せられることになろう。

斎藤尚吾氏は、子どもの読書コースを考えて、次のような読書する子どもの発達段階をえがいておられる。

① 幼年期と絵本――四歳頃から福音館や岩波の絵本を母親から授乳のように与えられ、ことばや文についてのイメージが育てられる。

子どもたちが最初にであう本（絵本）を目と耳でとらえることは、読書生活のはじまりであり、文学教育の第一歩である。

② 絵本からおはなしの世界へ――小学校にあがってから二年生のおわり頃までの間に、しぜんに絵本を卒業する。担任の読み聞かせやひとり読みで『長い長いペンギンの話』や『北極のムーシカ・ミーシカ』などの長編幼年童話の世界にひたる。（母子20分間読書の適期、これによって読書の日課が身につく）

③ 長編の物語を読破する――三年生頃から『クマのプーさん』や『ドリトル先生アフリカゆき』などに興味をもちはじめ、四年生になったら岩波少年文庫の目録などをもらって自分の読んだ本に○をつけていく。

読書の歯を強くし、きたえる時期である。

④ 集団読書によって――五年生頃から、なかまと読書グループを作って読後感を話し合うことを好む。六年生になったら『あらしの前』『あらしのあと』『こぐま星座』『長い冬』などの文学全集を読破する決心で一年間取り組む。

人生の読書黄金時代である。（岩波の本だけでなく、すぐれた日本の童話、文学作品、とくに新しい創作児童文学作品やノンフィクションの選択も重視する。）（校内全職員による子どもの読書運動。雑誌『文学教育』NO2宣協社）

右のような子どもを斎藤氏は考えておられるのであるが、この中で、集団読書の後、その読後感を、お互いに話し合うことは、各自の到りえている極（ポール）を語ることであり、また視野を広めると共に、客観化への方向づけを導くことだろう。またこの時期に、個人的な、文学の美質との出会いを経験させたいものである。小学生の年齢期の特徴であった勧善懲悪願望（能谷孝氏著『文学教育』P206）から離れて、中学二、三年生になると生徒達が既成の真善美についての考え方に対する疑いを抱き始めることは、現場によく見られることである。これは生徒達が、自己の納得のいくモラルを立て直そうと努力するようになる心理的衝動にもとづいている現象であろう。このような彼等の状況に対する疑問は、彼等を混迷に陥れるだろうが、それとともに、また、逆に、そこにこそ、彼等を救済する可能性が存していると言わねばならない。この疑問を解決の方向に発展させていくことが彼等の人生の建設の新たなる一歩であり、ここに、この意味での文学教育の出発点があると言わねばならないだろう。

彼等が文学を読むとき、人生の探求・真実と虚偽との区分け、人生いかに生きるべきか、これらを知ることが、最大の関心事になるのである。先に文学の機能と関連して引用した、奥野健男氏の「文学を読むことによって全体的な人間性を身につけるべきだろう。文学は人間的なバランスをとるために大きな価値があり、それなりの役割りを果すにちがいない。」という文章にあるように、彼等は人生の探求書として文学形象に対するようになる。現代人が現代の生き方を考えることは、人生の探求者である文学者と形象を通して対話するということであるからである。彼等は自分の心が信じるものを正当なものとして受け入れるのである。例えば蛍の巻の玉蔓のことば、「げに、いつはり馴れたる人や、さまざまに、さも酌み待らむ。ただ、いと、まことのことをこそ思う給へられけれ」（日本古典文学大系『源氏物語』二。傍点は引用者）に見るように。また、

文学は、隠者のそれであっても、奥底に愛があるので「さえていて一人でいてすこし寂しい心の状態」で書きつけた、私見によれば、それは、つれづれの対象という程の意味であるが「つれ〴〵草」は孤独な現代人の心に説得性を持つのである。ここに見る、人生の探求者としての作者と享受者との関わりのありさまはまた、次の伊藤整氏の言葉によっても明らかである。

「そして、この二十世紀の諸方法は、ヨーロッパの小説家たちにある共通した姿勢を与えている。彼等の作品は直接に話題の興味によって公衆に読まれるのではなく、その作家の方法自体、またはその方法でとらえた思想の意味によって読者に読まれる。作家は作品によって考えさせ、驚かせ、または教育する。二十世紀の中頃から小説は実証性を乗り越える思想表現の手段となり、読者に生活を、道徳を、人間性を思索させるものとなった。以前には笑いや涙を通して遠まわしに、あるいは作家の予期せぬ結果として行なわれたものが、じかに、難しく、苦しい課題として読者に課されることになった。宗教や哲学の受け持っていた問題を、小説が、もっと強力に、有効に果し得ると作家たちは考える。」（『小説の方法』P192）

矛盾と荒廃の現代社会において、確実なものを足がかりにして、生存を前に進めようとする時、この人生の普遍的なものを求める探求者としての、作家と享受者との相互の心の交流は、極めて有効な智恵を投与してくれるであろう。

もし、さらに、読者が、この相互の間に、ある乖離を感じるならば、そこから、新しい人間や社会のあり方を目ざして、真の意味においての、創作の仕事がなされなくてはならない。

教育の目的が、結局、正しい意味での自己開発を続けていける市民の育成ということであるならば、この人生の普遍的な生き方を求める探求者を最左翼にして、広く文学的思考を日常生活に生かすことの出来る人間を育てていくことを目的とする文学教育は、現代において重要な位置を占めるものと言わなければならないだろう。時代を前に進ませる力は、現体制の利益と、さらに、ここに見るような、思考力を備えた新しい世代の力であるからである。ここにおいて、この文学教育が、最近の統一カリキュラム発展への試みにいかほど貢献するものであるかは、もはや論をまたないところであろう。佐藤正夫氏は次のように述べておられる。

「児童・生徒の内面的な傾向と要求に一致しつつ、而も客観的な目的に向って秩序と統一とを以て不断にその学習を展開させるようなカリキュラムが発展されることによってのみ、自主的にして知性的・創造的な、而も社会全体のために建設的に協力し得る態度と力とが形成され、近代文化はその主観主義的・無政府主義的矛盾から救われることが出来るであろう。」（『現代教育課程論』第五章カリキュラムの綜合統一。）

総　括

以上において、われわれは、ことばをなかだちとして、享受者に感動を与え、一定の感情的な体験（イメージ）を引き起こし、その流れのうちに思想を伝達することによって、相手のその後の外界反映に方向づけを与える文学の独自・特有の機能に基づいて、矛盾と荒廃の現代文明の中で、文学をその創造・享受の中核に位置させることによって、人間を救済していこうとする方向を求めようとしてきた。すでに確かめたように、文学とは、一篇のテキストを通じて、

孤独な作家と孤独な読み手とが、互いに何か普遍的なものを確認しあい、あるいは互いにそれを求めあう一種の儀式ともいうべきものであり、また文学は個人のものではあるが、その個人を通じて、何か普遍的なものが伝わらなければ成立しないものであるから、ここから、近代文化の主観主義的・無政府主義的矛盾を蟬蛻する方途が導かれる。現代社会において、「この世界終末観は、その後の私の文学の唯一の母体をなすものである。」（『週刊朝日』67・8・11特集「原爆の日によせて」）と三島由紀夫氏が述べるように、原水爆は、戦後文学の一つの状況に、すでにその黒の座を占めている。また、自己につながるはずの機械は逆に人間を支配している状況にある。このような時代の中で、われわれは『群像』45年6月号特集「変革期のなかの文学教育」で大江健三郎氏が述べておられるように、前近代性批判と近代性批判の相剋をこそ生きぬいていかねばならないだろう。そしてこの時、先に見た文学教育は、高校生たちに、歴史的遺産の継承を全面的に拒否することがもたらすニヒリズムから救済し、人類史の道程についての系統的認識をもたらし、また、国民大衆の生活現実についての具体的把握を保証して、彼等の営為を確実に推進することに寄与していくことであろう。

（神戸工業高校教諭）